

流れを読む

史上最大のプレーヤー

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

二十世紀のラスト・ディケード九〇年代は二十一世紀を占う指針を与えてくれる。グローバル化とIT革命は、国家として不完全なアメリカを時代の寵児^{ちやうじ}たらしめた。九〇年代後半急伸したため、やや調整しつつあるが、二十一世紀は再びアメリカが輝く時代となる。さらに驚くべきは中国とインドの大きな可能性である。特に中国は「史上最大のプレーヤー」と恐れられながら、日増しにその存在感を大きくしている。十三億の人口を擁する巨人は時流にも乗って、高度成長を当分続けそうである。それを推し進めている発展の原動力が注目される。第一は広い意味での中国経済圏の実力はすでに日本を追い抜き、アメリカと肩を並べるほどになっているのではないかとこの見方がある。九三年の世界銀行報告は、二〇〇二年に購買力平価でみた中国圏の国民総生産はアメリカを抜き、日本の倍近くになって、世界一になると予測したが、どうやら現実味を帯びてきた。第二は十三億人の巨大市場に、高成長の弾みがついてきた。華南地区から始まった近代化の波は今、「大上海時代」への熱気となつて燃え上がっている。かつての日本の高度成長時代を上回る勢いだ、参加している日本人自身が感じているよ

うだ。さらに三峡ダムプロジェクトが完成すれば、かつての軍需工業都市「重慶」を中心とした工業技術基盤の集積がこれに加わる。第三はグローバル化とIT革命の追い風である。中国の力強い発展を後押ししているのは日・米・欧の国際的巨大大企業群である。さらに新しい動きとしてはEMSのごとき受託生産集中化がある。これは低賃金労働力活用から始まったが、今や規模の利益が大きく働き、効率性を一層高めつつある。そして世界中に広がる華僑ネットワークが強力な味方である事は言うまでもない。この世界に開かれた高度成長は、かつての日本のそれと大きく異なっており、グローバル時代の無限の可能性を感じる。第四は激しい競争と向上心が成長のエンジンとなっている。九二年春の南巡講話で鄧小平は「先富論」、すなわちなれる者から先に豊かになれと言ったが、今その鋭い歴史認識に基づく高い戦略性は大成功を収めつつある。国有企業や郷鎮企業の分社化、産学協同ベンチャーの設立、それに外資系企業の提携など多彩で激しい競争が展開され、世界的ブランドに成長した企業も出現しつつある。かつて沿海地区と内陸部の所得格差が百倍にも達するので、必ず内部抗争や暴動になるの

はないかと心配された。しかし逆にそうした格差が向上心を刺激し、勤労意欲を強め、労働流動性を高めて成長促進要因となっている。

こうして二十世紀末に始まった世界経済の構造変化は中国をして、史上最大のプレーヤーに押し上げつつあるが、もう一つ注目すべき国家はインドである。ここも人口十億超。ソフトウエア生産額の最近五年間の平均成長率は五〇%を上回る。それを支えているのは激しい競争を勝ち残り、鍛え上げられた若き技術者たちである。IT（インド工科大学）の受験競争率は五十倍超。バンガロール、ハイデラバードなどは世界のIT技術者の供給基地となってきた。

個人の自由な創造力と知恵を重視する情報化社会と、国境を越えた経済活動が日常化するグローバル化のシヨンの到来で、アメリカ、中国、インドなど、工業社会時代の「不完全国家」はその発展可能性を急速に高めてきた。この傾向は二十一世紀にはさらに強まる。工業社会に適合した、完全国家日本」の行き詰まりを世界から見るとこうなる。急げ日本。イノベーションを引き起こす構造改革なければ、二十一世紀日本の未来は暗い。